



世界創作の技法

■ 円城 塔

おおよそ、くだらないことが記されるのはそのたやすさのせいである。これが広場に立った石版に鑿^{のみ}で記せとかいう話になれば、内容を事前にかなり吟味せざるを得なくなる。

かつての小説家というものは、なによりもまず原稿用紙の升目を埋める技能者だった。一冊の本をつくるには数百枚単位の原稿用紙が必要だから、数万文字を書かねばならず、筆記用具や腕への負荷は半端ではない。現在最も過酷と言われる、ライトノベルと呼ばれるジャンルの書き手に要求されるのが月産 200 枚ラインだろうか。これはもう機械支援を受けなければ実現できない数字と考えるとよい。

今のところなんとか小説などを書いて暮らしているが、明日世界からラップトップが消滅したら即廃業するしかないという自覚はある。原稿用紙を埋めていくのと、キーボードを叩くのでは思考のありかた自体が違う。仕事になるとは思えない。

ごくごく自然ななりゆきとして、書くことがたやすくなれば書かれるものが増えていく。ついでに読む速度も上がらなければ不恰好だと思うのだが、読む速度のボトルネックは視覚系か脳の高次機能あたりに存在していてこれはなかなか手をつけにくい。人間がもたもたしている間に、世界で一番本を読んでいるのは検索エンジンということになってしまった感もある。いや冷静に考えよう。ワードプロセッサが記述支援のためのシステムなら、検索は読解支援のためのシステムということになるのではないか。たとえば何かの本を読む前に既読者の感想を検索するという行為は読書とは関係ないと言えるだろうか。印刷技術や記述技術

■ 円城 塔
作家

1972年札幌市生まれ。2000年東京大学総合文化研究科博士課程修了。ポスドク生活を経て小説家に転身。ジャンルを問わず活動中。2012年「道化師の蝶」で第146回芥川賞受賞。代表作に「Self-ReferenceENGINE」。



© 新潮社

の変化につれて、読書という言葉の意味もまた変わってはいないだろうか。

あるいはこうだ。ビッグデータの解析とは、機械があってはじめて可能となる「読書」の形なのではないか。そこに巨大なノンフィクションがあり、解析とは「要約」である。この図式と、本のあらすじをネットで検索する行為の差はそれほど巨大なものなのだろうか。

「最近小説を読むよりも、交通事故の統計データとかを見ている方が面白いんだよ」

当時助教授であった人物からそう聞いたのはまだ20世紀の頃だった。その時は意味が分からなかったが、ようやく少し身に染みてきた。それはきつとこういう問いだ。

小説家はビッグデータを書けるのだろうか。

小説家とはフィクションを書き、フィクションに捉われている生き物だと言われるが、それは本当に本当だろうか。もしも真実、フィクションに遊び自在にすることができているなら、ノンフィクションではあり得ない、フィクションとしてのビッグデータを生成できるべきではないのか。

ここでふと考えたりする。

この世がときにくだらなく見えたりするのは、この世界なるデータが、結構たやすく作られてしまったからではないのか。

